子どもの声を聞き取る

コミュニケーションの語法について

七木田　敦

ななきだ・あつし
広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設教授。博士（教育学）。専門は幼児教育学、発達支援学。兵庫教育大学、広島大学学校教育学部助教授を経て現職。著書に『実践事例に基づく障害児保育』（編著、保育出版社、二〇〇七年）、『保育そこが知りたい！気になる子Q&A』（チャイルド本社、二〇〇八年）など。

「鳴き声」と「泣き声」

バウリンガルというものをご存じだろうか。数年前盛んにテレビで紹介されていたあれである。いわば「犬の鳴き声判定器」。愛犬の「フラストレーション」「威嚇」「自己表現」「楽しい」「悲しい」「欲求」の六種類の鳴き声を判定する。販売元は「感情分析システム」と称しているが、なにこれはやはり「鳴き声」判定である。「ドリトル先生」の昔から動物と会話したいという欲求は時代を超えてわれわれ人間に深く内面化されていて、その（トンデモ）科学技術の応用に驚くよりもむしろ微笑ましく思ったのは私だけでないだろう。いつかは手にしたいと思っていたが、その後プッツリとマスメディアに見られなくなった。

ところがごく最近これと大変似たものにお目にかかったのである。次はネコ、鳥……いやいや赤ちゃんである。もちろん人間の。「ベビー〇〇〇」（仮名）という機器は、赤ちゃんの泣き声から、「空腹」「退屈」「不快」「眠気」「ストレス」を即座に判定するという。犬を対象としたそれより手が込んでいるかと思いきや、基本的構造は同じようなものと拝察した。まず

は何より、デモンストレーションである。定価といわれる価格のおよそ半額でゲットした件の機器は、重さ五〇〇グラム程度、片手に収まるほどで誠にコンパクト、内部に精緻なメカニズムが内包されているとはとても思えない。試しにスイッチを入れ、「本機より三〇センチメートル離して」というコマンド通りに（人目をはばかりながら）乳児の泣き声を真似てみる。反応がない。赤ちゃんの声ではなかったかと思い、「エーン、ウェーン、ギャー」と大小強弱とりまぜてあれこれやってみる。その後、しばらくして「反応中」の赤ボタン点滅。しばし分析まで時間がかかるらしい。（実際、泣いている赤ちゃんを面前にしたお母さんがこれだけ待てるだろうかというほどの時間がたってから）「不快」の判定である。さてさて私のどの声を拾ったのだろうか。

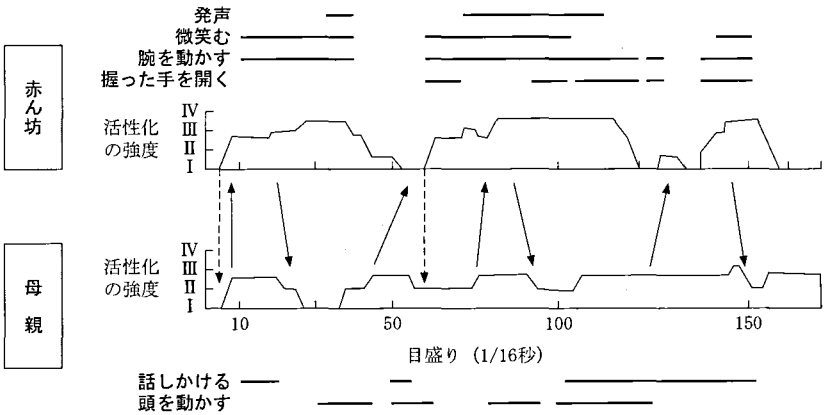
この機器が一番ウケるのが、大学生への授業においてである。まず驚くことに、今どきの学生は赤ちゃんの泣き声を知らない。ちょっと真似してみて……と尋ねると、これが男子学生を中心に「忘れた」「聞いたことがない」「……」との返答である。当方の困惑に同情してくれるのか、なかには積極的に赤ちゃんの泣き声を表情豊かに真似てくれる学生もいる（「表情は分析対象外」とのツッコミを忘れずに入れる）。おもしろいことに、出てくる結果はいつも「退屈」「眠い」のいずれかである。「君はいま退屈ですか？」と聞くと、がぜん眼を輝かせて「先生この器械はすごいですね、いくらするんですか」。そうか、そうか、それまで退屈な授業をしてゴメンね……とは思うものの、内面や気持ちを他人から断定的に言われるとたやすくそれを信じてしまうのは、現代の若者の占いブームや血液型性格診断と同根である。

大学生はまぁいい（本当はよくないんだろうけど）。この製品のターゲットは、お母さんなのである。お母さんをして、言葉を話せないわが子とこのような機器（それもかなりあやしい）を用いてまで理解したいと思わせている動機はなんなのであろうか。言い方を変えよう。どうしてお母さんは、泣き声からわが子の情動の揺れを推察する術を学ぼうとせず、かくも一義的なコミュニケーションを切望するのだろうか。

コミュニケーションを受け取る感受性

「コミュニケーションCommunication」という言葉

図1　母と子の「会話」



をひもとけば、接頭辞“com”は「共に」、また“commune”は「親しく語る」「心の友」等の意であり、「コミュニケーション」は「意志疎通等による親密なる関係」等の意味という。もともと母と子のコミュニケーションは、お互いに心を伝え合って、親密な親子関係をつくることが肝要となる。近年はこのような母子相互作用のなかで、母と子の行動と音声リズムが同調していることが確認され、非言語的コミュニケーションとして注目されている。図1のように[1]、母親の語りかけの音声と赤ちゃんの手の動きのリズムとの同調は、エントレインメント（引き込み同調現象）といわれ、生物一般に見られる音声と行動のリズムの同調現象であると説明される。

特に乳児の場合、「知覚機能は、相貌的知覚や力動感vitality affectに代表されている無様式知覚amodal perceptionといった人間ないし動物に備わった独特」なものであるとされる[2]（小林、一九九八）。要するに赤ちゃんの「泣き」に対する母親の理解というものは、生物として欠くべからざる学習過程なのである。私が危惧するのは「ベビー〇〇」を使って、いわばこの試行錯誤の学習過程を回避することで育つ養育者として

の感受性が損なわれはしないかということである。

決して有能とは言えない私（妻に言わせると）のような養育者＝父親であっても、わが子の「眠いとき」の泣き声と「空腹のとき」のそれとは、違っていたことを今でもクリヤーに思い出すことができる。それは私が子どもからのメッセージを必死に読み取ろうと日夜努力していたためかといえば、決してそうではない。少なくとも私の場合、子どもの「泣き」というものは不安を喚起させるものであったため、それを取り除くためのあらゆる覚知が動員され仮説化され（「前の食事の時間は」「おむつはいつ替えたっけ」「暑すぎ?」「おもちゃに飽きたかな」）、検証に移された。つまり子どもの生活上の文脈や表情から親は「察知」し、対応すること等々が刷り込まれた結果といってよいのである。

なにもたかが泣き声の判定器械、そんなに目くじらを立てなくとも……という声が聞こえてきそうである。けれども、この一義的コミュニケーションブームはこれだけではない。たとえば、「ベビーサイン」。ベビーサインは子どもが話し言葉を獲得する前に（二歳前後までに）、その意志をサインによって表出できるように教えようというものである。「空腹」「痛い」「美味しい」「靴」等々、子どもの日常生活に関連した事物、行動を子どもにサイン（ジェスチャー）によって伝達する。いわく「赤ちゃんの痛いところがわかります」「赤ちゃんのフラストレーションが減ります」。子どもの痛いところがわかりたいのはよしとしても、減らしたいのは「赤ちゃんのフラストレーション」ではなく、母親のそれである。つまり自然に話すまでが待てず、一刻も早く知りたいのである。それも「正しい」意味を。

コミュニケーションの「正しさ」

コミュニケーションは野球のキャッチボールによく似ている（そして、野球がうまくなりたければ、キャッチボールが基礎、というということが比喩的に聞こえるのも似ている）。変哲もないボールの投げ合いだが、正しくは「相手の胸元に投げ込む」ことを良しとする。

野球を始めたばかりの子どもの投球は、満足に届かないものもあれば、とてつもない方向への大暴投もある。その都度、「ったく」と舌打ちはするものの、大人は拾ってきたボールを子どもの胸元に「正確に」投

げ返す。そのうちなぜか、波長が合ってきて、当方の胸元に球が届くようになる。これでＯＫである。「正しい」キャッチボールは、そのうち心地よいものとなる。つまり大人のキャッチボールの作法とは、子どもの投げたどんなボールでもまずは捕ろうすることである。その所作を通じて、子どもは野球の極意（そんなものがあるかどうか）を学んでいくような気がする。

翻って、先の一義的なコミュニケーションを見てみよう。これはキャッチボールで言えば、胸元以外に投げられた球は、「捕る必要なし」とみなし、ひたすら胸元に「正確に」投げられたボールだけを待つというなんとも寒々しい風景を私に想像させる。

教室の中で同様な景色を見ることがある。私の専門は幼児教育、特に近年喧しい発達障害の子どもの保育である。幼稚園保育所から「発達が気になる子ども」の保育の相談があれば時間のゆるす限り観察し、その後に保育者と話し合う。子どもの発達の状態や家庭での養育、また日常的な保育について絡まった糸を一本ずつ解きほぐすように話を進める。Ａ幼稚園年長組の自閉症と診断されたＤ君について園長先生は次のように語った。

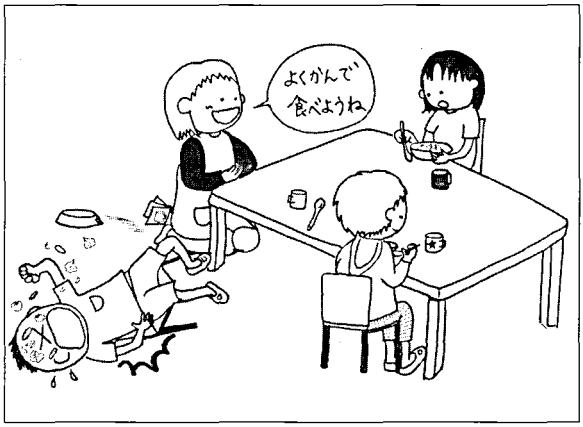
「お母さんも彼の障害を受け入れて、積極的に療育センターに相談に行っています。センターの指導員の方も、定期的に幼稚園を訪ねてこられて、指導について助言をしてくれます。専門家の助言なので、とても助かっています。先日、他の幼稚園にも呼びかけて、『自閉症の保育』の研修会も開催しました」

新しい「幼稚園教育要領」にも、障害のある幼児の教育ではその「関係機関連携」の重要さが述べられている。幼稚園の中は至る所に、絵や写真のカードが貼り付けられている。トイレには、「くつをぬぐ」「すりっぱにはきかえる」「くつをそろえる」等々、絵とことばで説明した表がドアの横に貼ってある。

昼食の時間。準備ができるまで静かに座っていたＤ君、おかずの中に気に入らないものを発見したのか、椅子を前後に「バッタン、バッタン」させ始めた。先生はこの事態に慣れているようで、視線で行為をとらえながらも、止めさせようとはしない。しだいに奇声を発しながら椅子を激しく揺するＤ君が私は気が気でならない。と思ったその瞬間、椅子は大きく後ろへ倒れ、座っていたＤ君の顔面は野菜サラダだらけに。運良く後頭部を強打することはなかったが、大泣きであ

る。「ほらやっぱり……これは大変！」と思ったのは私だけで、幼稚園の先生は誰ひとりD君のところに歩み寄る様子はない。しばらくして保育補助の先生が、「ちゃんと座って食べようね」と驚くほど冷静に告げ、席に着かせた。降園後の話し合いで、園長にうかがった。

図2　D君の幼稚園でのエピソード



©守田香奈子　2008

「D君の『望ましくない行動』は、大人の注意を引きたいという意図があるので、そのような場合は保育者は関わらないこと、というのが園の方針です」

「問題行動」を「消去」するために「無視」をするというのは行動理論の説くところだが、この不幸な（そしておそらく「誤った」）事例は、あの「胸元を外れた球は、捕る必要なし」と見なすキャッチボールの情景を思い起こさせた。

おわりに

長年子どもと最も近い場所で研究をされてきた本田和子先生の嘆息が新聞に掲載されたのをご記憶の方もおられよう[3]。

「西東京市の『西東京いこいの森公園』の噴水に集まる子どもの遊び声を、裁判で『騒音』と認定した仮処分が出て一年。問題の噴水は止まったままだ。各地の児童館や小中学校では、近隣からの騒音苦情対策のため、夏でも窓を閉め、校庭のクラブ活動でも『大声禁止』とするところもある。公園では危険性のある遊具は撤去され、サッカーやキャッチボールも禁止され

ている公園も少なくない。これらの施設は子どもに必要な『活動の場』ではなく、子どもを『囲い込み』『おとなしくさせておく場所』に変わったのだろうか。（略）実際に「少子化」が「子ども嫌い」を生み、さらに『少子化』を加速させている。彼らを育てるべき大人の側が、子どもとの付き合いを厄介に感じ始めている」

本田先生が推測されるように、このような嘆かわしい事態には「少子化」が原因の一つであるかもしれない。ただ私は別の想定をしている。つまり大人と子どもとの間のあまりにも「正確な」コミュニケーションへの指向が、そうでない場合の「子ども無理解」「子ども嫌い」（わけのわからないことはキライ）を生み、そして「少子化」を加速させていると見る。いずれにしろ明治開国期に欧米人が驚嘆したほど「子どもフレンドリー」だったこの国は、とうとう子どもの声さえも「騒音」として公的に署名登録してしまったのである。つまり大人は子どもの声（「泣き」を含めて）やメッセージを感受する閾値（いきち）をどんどん狭めてきた。狭めていってとうとう「受信拒否」になったのである。

紙面が尽きてきた。大急ぎで結論を言おう。子どもの発するメッセージ、それは言葉という形式をとらないかもしれないが、様々な文脈で解釈が可能なものの中から、大人は自分にとって「意味不明」なものとして届くことの曖昧さに耐えられなくなっているということだろう。「正確」なコミュニケーションを指向するあまり、本当は拾ってやらなくてはならないメッセージを「エラー・メッセージ」とし、タグをつけ「ごみ箱」へ放棄してしまう。これによって生じる代償について私はうまく想像することができない。

[文献]

1) Trevarthen, C. Descriptive analysis of infant communicative behavior. In H. R. Schaffer (Ed.) *Studies in mother infant interaction.* Academic Press. 1977.

2) 小林隆児「妊産褥婦および乳幼児のメンタルヘルスシステム作りに関する研究」、「乳幼児期早期の母子コミュニケーションの質的評価とありかたに関する研究」厚生科学研究費補助金（こども家庭総合研究）研究協力者報告書、一九九八年

3) 本田和子「少子化問題：子どもにも住みにくい社会」朝日新聞二〇〇八年十月十六日